

エレミヤ書34-36章「主の命令に対する態度」

1A 日和見 34

1B 免れられない捕囚 1-7

2B 翻る心 8-22

1C 契約違反 8-11

2C 守りの御手からの解放 12-22

2A 従順 35

1B 先祖からの命令に従う人々 1-11

2B 神からの命令に聞かない人々 12-19

3A 公然たる拒否 36

1B 書き記された御言葉 1-8

2B 恐れる首長たち 9-20

3B 切り刻む王 21-32

1C 御言葉に対する苦み 21-26

2C 廃れない御言葉 27-32

本文

エレミヤ書 34 章を開いてください。私たちは前回で、捕囚の民に与えられた帰還の希望、その幸いな計画について読み終えました。34 章から 36 章は、エホヤキム及びゼデキヤの時代における、彼らの不従順について見ていきます。今日学ぶ三章は、主の命令や言葉に対して、人々がどのように応答しているのか、その態度について見ていきます。

1A 日和見 34

1B 免れられない捕囚 1-7

34:1 バビロンの王ネブカデレザルと、その全軍勢、および彼の支配下にある地のすべての王国とすべての国々の民が、エルサレムとそのすべての町々を攻めていたとき、主からエレミヤにあったみことばは、こうである。34:2 「イスラエルの神、主は、こう仰せられる。行って、ユダの王ゼデキヤに告げて言え。主はこう仰せられる。『見よ。わたしはこの町をバビロンの王の手に渡す。彼はこれを火で焼こう。34:3 あなたはその手からのがれることができない。あなたはかならず捕えられて、彼の手に渡されるからだ。あなたの目はバビロンの王の目を見、彼の口はあなたの口と語り、あなたはバビロンへ行く。』34:4 ユダの王ゼデキヤ。ただ、主のことばを聞きなさい。主はあなたについてこう仰せられる。『あなたは剣で死ぬことはない。34:5 あなたは安らからに死んで、人々は、あなたの先祖たち、あなたの先にいた王たちのために香をたいたように、あなたのためにも香をたき、ああ主君よと言ってあなたをいたむ。このことを語るのはわたした。』…主の御告げ。…」

時は、ゼデキヤが王の時です。彼の治世の第九年目の時にバビロンに反逆しました。そして、バビロンがユダの町々を攻めて、包囲していました。攻めている軍勢が、「その全軍勢、および彼の支配下にある地のすべての王国とすべての国々の民」となっています。バビロンが既に征服した国々の民も共に、ユダとエルサレムを攻めていたのです。その時に、主がエレミヤによってゼデキヤに語った言葉です。ゼデキヤには、いささかの期待があったのでしょうか。エジプトの援軍によって、もしかしたらバビロンから解放されるかもしれないという期待です。けれども主は、そんなことは決してないと断言しています。「あなたの目はバビロンの王の目を見、彼の口はあなたの口と語り」という表現がそれを物語っていますが、彼と面と向かって対峙するようになります。つまり、神の怒りを免れることはできない、ということです。パウロが悔い改めない人たちに対して、「あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか？(ローマ 2:3)」と言いました。

けれども、ゼデキヤはバビロンで牢獄の中で死にますが、それでもその死を悼む同胞の民がいるというところで、僅かな慰めを主は与えておられます。エホヤキムはエルサレムの町の外で、しかばねが捨てられて、彼を悼む者はいないと預言されたのに対して、ゼデキヤは軽い罰で済むようです。

34:6 そこで預言者エレミヤは、これらすべてのことばを、エルサレムでユダの王ゼデキヤに語った。34:7 そのとき、バビロンの王の軍勢は、エルサレムとユダの残されたすべての町、ラキシユとアゼカを攻めていた。これらがユダの町々で城壁のある町として残っていたからである。

ラキシユとアゼカは、ユダの国にとって要塞の町です。エルサレムよりは南で、南北に走る山地と地中海沿岸地域の間にある低地である「セフェラ」にあります。イスラエルの北の勢力と南の勢力がぶつかる戦略的な場所だったので、南ユダの初代の王レハブアムが要塞化しました(2歴代 11:9)。ですから、バビロンがこの町を攻めているということは、エルサレムの陥落がかなり近づいていることを示唆しています。

そしてここは、聖書の記述がいかに正しいかを確かめることのできる箇所です。1935年にラキシユの町の遺跡の中で、ちょうどこの時期のことが書かれている陶器の破片が見つかりました。「ラキシユ文書」と呼ばれています。ラキシユにいる指揮官に対して、アゼカが倒れたことを示唆する文章です。一つに、「バビロンに従属せよ」と説く預言者がいることを言及しています。もう一つ、「ラキシユの合図の火を待っている。アゼカのは見えないからだ。」という文面が残っています。

2B 翻る心 8-22

1C 契約違反 8-11

34:8 ゼデキヤ王がエルサレムにいるすべての民と契約を結んで、彼らに奴隷の解放を宣言した後、主からエレミヤにあったみことば。34:9 ..それは各自が、ヘブル人である自分の奴隷や女奴隷を自由の身にし、同胞のユダヤ人を奴隷にしないという契約であった。34:10 契約に加入した

すべての首長、すべての民は、それぞれ、自分の奴隷や女奴隷を自由の身にして、二度と彼らを奴隷にしないことに同意し、同意してから彼らを去らせた。34:11 しかし、彼らは、そのあとで心を翻した。そして、いったん自由の身にした奴隷や女奴隷を連れ戻して、彼らを奴隷や女奴隷として使役した。・・

ここで大事な言葉は、「あとで心を翻した」であります。ヘブル人の奴隷解放は、出エジプト記 21章に出てくる神の定めです。六年間仕えた後は、七年目には自由にしなければいけないというものです。けれども、ユダはずっと守り行なっていませんでした。そこでゼデキヤが民に契約として結ばせ、奴隷解放宣言を出しました。ここまでは良かったのです。けれども、エジプトが軍隊を北に動かして、バビロンがエルサレムの包囲を一時的に解除しました。その時に、彼らは心を翻したのです。再びヘブル人を奴隷として使役したのです。

ここにゼデキヤの、日和見的な心を見ます。それは人に対する態度だけでなく、神ご自身に対してさえ、日和見な態度になっていることを示しています。バビロンがエルサレムを取り囲んでいまずので、そこでは主の戒めを守って、正義を行なって、悔い改めているようにさえ見えますが、実は状況が悪いかから、神に何かをしていただきたいという取引のような心になっています。ゆえに、状況が好転したかに見えたとき、一気に緊張が解け、前からの行ないを、つまりヘブル人を奴隷にすることを再び行ない始めたのです。条件付きの従順と言ってよいでしょうか、あるいは困った時の神頼みと言っても良いでしょう。私たちも同じようにして、自分を欺くことがあります。つまり、神に従っているように見えるのですが、「これこれの条件があれば」と自分の目的のための手段として神に従います。その条件が合わなければ、神に従わないという態度です。

2C 守りの御手からの解放 12-22

34:12 そこで、主からエレミヤに次のような主のことばがあった。34:13 「イスラエルの神、主は、こう仰せられる。『わたしが、あなたがたの先祖をエジプトの国、奴隷の家から連れ出した日に、わたしは彼らと契約を結んで言った。34:14 七年の終わりには、各自、自分のところに売られて来た同胞のヘブル人を去らせなければならない。六年の間、あなたに仕えさせ、その後、あなたは彼を自由の身にせよと。しかし、あなたがたの先祖は、わたしに聞かず、耳を傾けなかった。34:15 しかし、あなたがたは、きょう悔い改め、各自、隣人の解放を告げてわたしが正しいと見ることを行ない、わたしの名がつけられているこの家で、わたしの前に契約を結んだ。34:16 それなのに、あなたがたは心を翻して、わたしの名を汚し、いったん自由の身にした奴隷や女奴隷をかってに連れ戻し、彼らをあなたがたの奴隷や女奴隷として使役した。』

主が出エジプト記にある、七年目の奴隷解放について話し、先祖はそれを行なっていなかったけれども、ゼデキヤは行なったと評価しておられます。ところが、心が翻たと責めておられます。ここで、心を翻すと、「わたしの名を汚し」としていると主は言われるのです。そうです、一度、主に従いながら心を翻せば、それは神の名を汚すこと、神の名誉に泥を塗るような行為であります。イエス様

は誓ってはならない、と命じられた所で語られましたね。「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」に
しなさいと言われました。

34:17 それゆえ、主はこう仰せられる。『あなたがたはわたしに聞き従わず、各自、自分の同胞や
隣人に解放を告げなかったので、見よ、わたしはあなたがたに…主の御告げ。…剣と疫病ときき
んの解放を宣言する。わたしは、あなたがたを地のすべての王国のおののきとする。

主は皮肉を言われています。彼らが奴隷を解放しなかったので、代わりにあなたがたそのもの
から、彼らを解放させてあげようということです。つまり、虐げているあなたがたが死ぬことによっ
て、彼らは解放されるということです。

34:18 また、わたしの前で結んだ契約のことは守らず、わたしの契約を破った者たちを、二つに
断ち切られた子牛の間を通った者のようにする。34:19 二つに分けた子牛の間を通った者は、ユ
ダの首長たち、エルサレムの首長たち、宦官と祭司と一般の全民衆であった。34:20 わたしは彼
らを、敵の手、いのちをねらう者たちの手に渡す。そのしかばねは空の鳥、地の獣のえじきとなる。
34:21 わたしはまた、ユダの王ゼデキヤとそのつかさたちを敵の手、いのちをねらう者たちの手、
あなたがたのところから退却したバビロンの王の軍勢の手に渡す。34:22 見よ。わたしは命じ、…
主の御告げ。…彼らをこの町に引き返させる。彼らはこの町を攻め、これを取り、火で焼く。わたし
はユダの町々を、住む者もない荒れ果てた地とする。』

ゼデキヤは、先の契約を守らせるために、子牛を真っ二つに断ち切り、その間を通るとい昔か
らの慣わしを行なったようです。主がアブラハムと契約を結ばれる時に、主はこれを行ないなさい
と命じられました。そして夜になったときに、その間を、燃え立つかまどとたいまつが通りました。そ
して主はアブラハムに、「エジプトの川からユーフラテス川までの土地を、あなたに与える。」と約
束されたのです(以上、創世記 15 章参照)。この慣わしは、その間を通る者がもし契約を破れば、
この牛のようになるという意味がありました。それだけ契約は履行されるものであり、真剣なもの
であることを示すものでした。

ここでバビロンについて、彼らの行動について、主がお許しになればいつでもユダとエルサレム
を滅ぼすことができる状態であったところ、主は敢えて憐れみを示して、彼らが悔い改めることを
待っておられました。けれども彼らが言うことを聞かないので、バビロンがしたいように引き渡され
ました。主は敢えて、災いが起こらないように守っておられるのですが、それが当たり前のようにし
ていて神から離れるのであれば、このように神は、バビロンの横暴な侵略行為をも用いて、ご自分
の裁きを行なわれます。

2A 従順 35

ですから、条件付きの従順、日和見主義がありました。次に見るのは、従順の模範です。

1B 先祖からの命令に従う人々 1-11

35:1 ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの時代に、主からエレミヤにあったみことばは、こうである。
35:2 「レカブ人の家に行って、彼らに語り、彼らを主の宮の一室に連れて来て、彼らに酒を飲ませよ。」35:3 そこで私は、ハバツィヌヤの子エレミヤの子であるヤアザヌヤと、その兄弟と、そのすべての息子と、レカブ人の全家を率い、35:4 彼らを主の宮のイグダルヤの子、神の人ハナンの子らの部屋に連れて来た。それは、首長たちの部屋の隣にあり、入口を守る者シャルムの子マアセヤの部屋の上にあった。

時は、エホヤキムの時代に戻っています。そして、彼らを主の宮の一室に連れて行きます。「神の人ハナンの子ら」と言っていますが、国に仕えている者たちの中で、若干数、エレミヤに同情的、また神を恐れる人たちがいたようです。

そこに、「レカブ人の家」の者たちを招きます。彼らのルーツは、モーセの姑イテロです(1歴代 2:55)。ミデヤン人ですが、モーセたちがシナイ山から約束の地へ荒野の旅を始めるとき、モーセは道案内してほしいとイテロの息子ホバブに頼みました(民数 10:29)。それ以来、彼らはイスラエルと共に行動し、生活をともにしたのです。彼らはケニ人と呼ばれます。彼らはネゲブ砂漠を中心に遊牧をしていました(士師 1:16)が、イスラエルの北側にも住んでいました。それでも、今のベドウィン、主の民と共に過ごしますが遊牧民のように定住することなく、それゆえ、周囲のカナン人の慣わしにも従わなかったのでしょう。列王記の時代、北イスラエルがアハブによってバアル信仰に陥っていた時代に、神がエフーを立てられ、彼が猛烈にバアルを信仰している王や祭司を殺していきました。このエフーを迎えに、レカブ人のヨナダブがやってきました。そしてエフーの急進的な宗教改革に彼も加わります(2列王 10:15-17)。北イスラエルが崩壊したので、ユダの地域に移動してきましたが、今はバビロンやシリヤが攻めて来ています。それで行き場を失って、エルサレムに住んでいました。

35:5 私は、レカブ人の家の子たちの前に、ぶどう酒を満したつぼと杯とを出して、彼らに「酒を飲みなさい。」と言った。35:6 すると彼らは言った。「私たちはぶどう酒を飲みません。それは、私たちの先祖レカブの子ヨナダブが私たちに命じて、『あなたがたも、あなたがたの子らも、永久にぶどう酒を飲んではいけません。35:7 あなたがたは家を建てたり、種を蒔いたり、ぶどう畑を作ったり、また所有したりしてはいけません。あなたがたが寄留している地の面に末長く生きるために、一生、天幕に住め。』と言ったからです。35:8 それで、私たちは、私たちの先祖レカブの子ヨナダブが私たちに命じたすべての命令に聞き従い、私たちも、妻も、息子、娘たちも、一生、ぶどう酒を飲まず、35:9 住む家も建せず、ぶどう畑も、畑も、種も持ちません。35:10 私たちは天幕に住み、すべて先祖ヨナダブが私たちに命じたとおりに、聞いて行なってきました。35:11 しかし、バビロンの王ネブカデレザルがこの国に攻め上ったとき、私たちは『さあ、カルデアの軍勢とアラムの軍勢を避けてエルサレムに行こう。』と言って、エルサレムに住んだのです。」

エフーの宗教改革に協力したヨナタブですが、彼は自分の一族に、ここに書かれているような言い伝えを残しました。まず、ぶどう酒を飲んではならないことです。それは、ぶどう酒によってその酔いから愚かなことをしかねないことがあったでしょう。また定住しないので、ぶどう園を持つこともできません。周囲のカナン人はぶどう酒による儀式があったので、ぶどう酒を飲まないことによって、忌まわしい慣わしに関わることから守られます。ちょうど、主が、自分を主に聖別された者とするナザレ人と似たような禁欲と献身なのだろうと思います。そして、家を建てる、畑を耕すこともしてはいけません。これは、彼らはイスラエルの民と共に住むことに捧げていたからでしょう。イスラエルの民には土地は割り当てられていますが、彼らには神の約束はありません。ですから、先祖がシナイ半島やアラビヤ半島にいた時と同じように、遊牧の生活を続けたのです。また、定住生活をしないことによって、定住することに伴う誘惑からも守られます。イスラエルの民は、その誘惑に見事に陥ってしまったのですが。

そして、北イスラエルから移住してきたけれども、バビロンやアモン(シリア)が攻めてくるので、そこにもいることができず、今は、一時的にエルサレムの城内で避難している状態です。ですから、エルサレムに定住するつもりはなく、先祖の言い伝えを守って、遊牧をするつもりなのです。今でもあの地域には、驚くことに遊牧民がいます。イスラエルの先進国なのですが、紀元前二千年頃に、アブラハム、イサク、ヤコブの族長生活と同じように暮らしている人々がいます。その彼らにエレミヤはぶどう酒を勧めました。けれども、それは彼らを惑わしているのではなく、むしろ、彼らがそれでもぶどう酒は飲まないと分かっていたので、そうしたのです。そして、彼らがエルサレムに住んでいても、それでも先祖からのしきたりを守るためにいることを示すためであったでしょう。

2B 神からの命令に聞かない人々 12-19

35:12 そこで、エレミヤに次のような主のことばがあった。35:13 「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。行って、ユダの人とエルサレムの住民に言え。『あなたがたはわたしのことばを聞いて懲らしめを受けようとししないのか。…主の御告げ。…35:14 レカブの子ヨナダブが、酒を飲むなど子らに命じた命令は守られた。彼らは先祖の命令に聞き従ったので、今日まで飲まなかった。ところが、わたしがあなたがたにたびたび語っても、あなたがたはわたしに聞かなかった。35:15 わたしはあなたがたに、わたしのしもべであるすべての預言者たちを早くからたびたび送って、さあ、おのおの悪の道から立ち返り、行ないを改めよ。ほかの神々を慕ってそれに仕えてはならない。わたしがあなたがたと先祖たちに与えた土地に住めと言ったのに、あなたがたは耳を傾けず、わたしに聞かなかった。35:16 レカブの子ヨナダブの子たちは、先祖が命じた命令を守ってきたのに、この民はわたしに聞かなかった。』

主がレカブ人を連れてくるようにされたのは、ユダとエルサレムの住民に対して叱責をするためでした。それは、彼らが先祖の言い伝えを守っているのに、ユダの民、エルサレムの住民は、主なる神の言われることを守っていないという叱責です。主は、ここで対比を行なっておられます。一つは、ヨナタブという一人の人間であり、もちろん欠けのある人が言っている言葉に対して、レカブ人

はその言いつけに聞き従っています。それに対して、ユダの人たちは永遠の、欠け何一つない神であるにも関わらず、従えていないのです。次に、レカブ人はただ一度、その命令を受けていただけでした。けれども、ユダの民は14節にあるように、「たびたび語っても、あなたがたはわたしに聞かなかった」のです。さらに、レカブ人は300年近くまえに語られたことを守っているのに、ユダの民は、たびたび出てくる預言者によって語られ、たった今、生きているエレミヤという預言者によっても語られているのに聞き従っていません。それゆえに、主は彼らを裁かれます。

私たち人間はしばしば、なんと神は怒りに満ちていて、人を残虐に裁かれるのかと疑いや不満を持ちます。しかし、それは神が全く正しい方であることを忘れてしています。正しい方が裁かれるのは、全く正しいことです。そして、のあまりにも寛大な忍耐深さがあるので、むしろ、とてつもない甘えと頑なさによって、自分たちの罪を明らかにしているのです。地上にいる父にさえ、二度、三度、懲らしめを受けたらその言っていることに従うのに、むしろ、天におられる方が忍耐深く、滅ぼすことをなさらないので、この方が裁くとお決めになる時に、「そんな神は、愛ではない」と責めるのです。そして、主が厳しい言葉で語られるということは言いかえると、それでも彼らを生かしておられるということであり、ご自身に自ら立ち上がることを願って、怒りの御手を控えておられるからです。人の罪というのはとても深く、善に対して悪で応答し、憐れみに対して反抗、また冒瀆によって応答します。しかし神は愛なのです、それでも私たちを見捨てず、最後はご自分の御子にご自分の怒りの全てをぶつけられたのです。

35:17 それゆえ、イスラエルの神、万軍の神、主は、こう仰せられる。『見よ。わたしはユダと、エルサレムの全住民に、わたしが彼らについて語ったすべてのわざわいを下す。わたしが彼らに語ったのに、彼らが聞かず、わたしが彼らに呼びかけたのに、彼らが答えなかったからだ。』35:18 エレミヤはレカブ人の家の者に言った。「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『あなたがたは、先祖ヨナダブの命令に聞き従い、そのすべての命令を守り、すべて彼があなたがたに命じたとおりに行なった。』35:19 それゆえ、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『レカブの子、ヨナダブには、いつも、わたしの前に立つ人が絶えることはない。』」

最後の、「いつも、わたしの前に立つ人が絶えることはない。」というのは、いつもイスラエルの民と共に生きることができ、エルサレムの神殿に関わることに携わることができるということでしょう。異邦人であるけれども、それでもイスラエルの神を敬いながら生きるその彼らの姿勢を、主は尊んでおられるということでしょう。事実、ユダの民がエルサレムに帰還後、ネヘミヤの時代にエルサレムの城壁を再建する時、彼らが工事に加わっている姿を見ることができます(3:14)。

私たちは、レカブ人から、従順について学びますね。従順とは、あの「あなたの父と母を敬いなさい。」の命令に表れている内容です。自分が理解しているから従うのではなく、しなさいと言われるから行なうことです。幼き子のように、自分の理解では別に問題ないと思ったり、感じていても、それでも言われたのだから、という理由だけで従う姿です。自分ができるかどうか、ではなく、自分

の持っている強い意志を降ろして、ゆだね、服従することです。今の時代、人権や自由などという言葉が使われています。それ自体は神という権威があるからこそ尊い賜物であります。神の権威を退けて、自分こそが大事なのだという自己愛にすり替えられています。そして従順という言葉すら、何か悪いもののように語られます。しかし、エレミヤ 35 章にあるのが主の御心です。

3A 公然たる拒否 36

では、主の命令に対して公然と反発したらどうなるのでしょうか？これまで、日和見的な従順と、本当の従順を見ました。次は、真っ向から、あからさまに神の言葉に逆らう言葉を読みませう。

1B 書き記された御言葉 1-8

36:1 ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの第四年に、主からエレミヤに次のようなみことばがあった。36:2 「あなたは巻き物を取り、わたしがあなたに語った日、すなわちヨシヤの時代から今日まで、わたしがイスラエルとユダとすべての国々について、あなたに語ったことばをみな、それに書きしるせ。36:3 ユダの家は、わたしが彼らに下そうと思っているすべてののわざわいを聞いて、それぞれ悪の道から立ち返るかもしれない。そうすれば、わたしも、彼らの咎と罪とを赦すことができる。」

再びエホヤキムの時代です。そして第四年目の話です。これまでも何回か、第四年に行なわれた預言が記されていましたが、ネブカデネザルがバビロンの王となったその元年でもあります(25:1)。同じ年に、カルケミシュでエジプトがバビロンに敗れていました(46:2)。つまり、バビロンがネブカデネザルによって強くなり、エジプトよりも優勢になり、イスラエルとその周囲の全領域に勢力を伸ばす大事な年になったということです。この時に、エジプトの傀儡であったエホヤキムが、バビロンに従う者となりました。しかし今、ネブカデネザルがこの地域から離れていったのではないかと思います。彼の父が死んで、自分が即位しなければいけないからです。その時に主がエレミヤに語られました。彼らがここで悔い改めなければ、バビロンがやって来てエルサレムに災いをもたらすという内容です。

ヨシヤの時代からの全ての預言を書き記しなさいと命じられています。だいたい二十二年間分の預言です。ここで書き残された巻き物が、神からのものとしてユダヤ人の間で正典となりました。第一次捕囚の民としてバビロンにいたダニエルは、既にエレミヤ書を入手していました。これを読んで、エルサレムの荒廃が終わるのが七十年であることを知りました。そして私たちも、今、文書として手にしているのは、元々は口で預言していたものを文書で残しているからです。午前礼拝で話しましたが、文書で残っているこの聖書は、神が預言者に語られたものを書き記していること、靈感を受けているものなのだと思います。ダビデもこう言いました、「主の霊は、私を通して語り、そのことばは、私の舌の上にある。(2サムエル 23:2)」ですから、「聖書はすべて、神の靈感によるもの(2テモテ 3:16)」です。

36:4 それでエレミヤは、ネリヤの子バルクを呼んだ。バルクはエレミヤの口述に従って、彼に語られた主のことばを、ことごとく巻き物に書きしるした。36:5 そしてエレミヤは、バルクに命じて言った。「私は閉じ込められていて、主の宮に行けない。36:6 だから、あなたが行って、主の宮で、断食の日に、あなたが私の口述によって巻き物に書きしるした主のことばを、民の耳に読み聞かせ、また町々から来るユダ全体の耳にもそれを読み聞かせよ。36:7 そうすれば、彼らは主の前に祈願をささげ、それぞれ悪の道から立ち返るかもしれない。主がこの民に語られた怒りと憤りは大きいからである。」36:8 そこでネリヤの子バルクは、すべて預言者エレミヤが命じたとおりに、主の宮で主のことばの巻き物を読んだ。

書かれた預言を、バルクが読み上げました。エレミヤが閉じ込められているのは、なぜか分かりませんが、これまで読んだ経緯では、彼を捕えて足枷につないだパシュフルという祭司にいましたし、そのような形で預言を語ったことによって捕えられていた可能性があります(20:2)。そして、「断食の日」に語るようにバルクに言いつけています。エホヤキムがこの布告を出したのでしょうか、それはバビロンの脅威が現実的なものとなって、そこから救われるために断食を布告したのでしょうか。けれども主が語られていることは、その正反対のことでした。

2B 恐れる首長たち 9-20

36:9 ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの第五年、第九の月、エルサレムのすべての民と、ユダの町々からエルサレムに来ているすべての民に、主の前での断食が布告された。

第四年に書き記しなさいと主は命じられていたので、全てを書き記すのに一年ぐらいかかったのでしょう。

36:10 そのとき、バルクは、主の宮の、書記シャファンの子ゲマルヤの部屋で、..その部屋は主の宮の新しい門の入口にある上の庭にあった。..すべての民に聞こえるように、その書物からエレミヤのことばを読んだ。36:11 シャファンの子ゲマルヤの子ミカヤは、その書物にあるすべての主のことばを聞き、36:12 王宮の、書記の部屋に下ったが、ちょうど、そこには、すべての首長たちがすわっていた。すなわち書記エリシャマ、シェマヤの子デラヤ、アクボルの子エルナタン、シャファンの子ゲマルヤ、ハナヌヤの子ゼデキヤ、およびすべての首長たちである。36:13 ミカヤは、バルクがああ巻き物を民に読んで聞かせたときに聞いたすべてのことばを彼らに告げた。

主の宮のゲマルヤの部屋から、バルクは読んでいます。その父シェファンは、ヨシヤに対して神殿で発見された律法を読んだ人です。民が歩く姿を眺めることができる部分があったのでしょうか、そこでバルクが語っていましたが、それをゲマルヤの子ミカヤが聞いていました。それが、とてつもなく深刻で重要であったことを察したので、それで首長たちが座っていた書記の部屋に行きました。彼自身の父ゲマルヤもそこにいました。

36:14 すべての首長たちは、バルクのもとにクシの子シェレムヤの子ネタヌヤの子エフディを遣わして言させた。「あなたが民に読んで聞かせたあの巻き物、あれを手に持って来なさい。」そこで、ネリヤの子バルクは、巻き物を手に持って彼らのところにはいつて来た。36:15 彼らはバルクに言った。「さあ、すわって、私たちにそれを読んで聞かせてくれ。」そこで、バルクは彼らに読んで聞かせた。36:16 彼らがそのすべてのことばを聞いたとき、みな互いに恐れ、バルクに言った。「私たちは、これらのことばをみな、必ず王に告げなければならない。」

彼らは正しい反応をしています。「みな互いに恐れ」ていると言います。エレミヤの時代には、幸いなことに、首長たちの一部に、このように御言葉に対する健全な恐れを持っている人々がいました。26章において、エレミヤに対して危害を加え、殺そうと訴えていた祭司や預言者がいるなかで、首長たちはエレミヤが主の名で預言していること、それから、ヒゼキヤの時代に預言者したミカも、エルサレムが廃墟になるという預言をしたのにヒゼキヤは殺さなかったし、また王が主を恐れたので、その災いが下らなかった話をして、エレミヤが殺されるのをなんとか守ることができた話が書かれています。イザヤ書には、いけにえを捧げる儀式よりも、主の言葉を恐れる者に目を留めることが書かれています。「わたしが目を留める者は、へりくだって心碎かれ、わたしのことばにおののく者だ。(66:2)」

36:17 彼らはバルクに尋ねて言った。「さあ、どのようにして、あなたはこれらのことばをみな、彼の口から書きとったのか、私たちに教えてくれ。」36:18 バルクは彼らに言った。「エレミヤがこれらすべてのことばを私に口述し、私が墨でこの巻き物に書きしるしました。」36:19 すると、首長たちはバルクに言った。「行って、あなたも、エレミヤも身を隠しなさい。だれにも、あなたがたがどこにいるか知られないように。」36:20 彼らは巻き物を書記エリシャマの部屋に置き、庭の王のところに行ってこのすべての事を王に報告した。

首長たちは彼らの安全を気にしました。預言者の中には、そのように身を隠した預言者がいました。エリヤですね。アハブに神の言葉を告げて、ケレテ川に身を隠しました。主が命じられています。「1列王 17:3 ここを去って東へ向かい、ヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに身を隠せ。」

3B 切り刻む王 21-32

1C 御言葉に対する苦み 21-26

36:21 王はエフディに、その巻き物を取りに行かさせたので、彼はそれを書記エリシャマの部屋から取って来た。エフディはそれを、王と王のかたわらに立つすべての首長たちに読んで聞かせた。36:22 第九の月であったので、王は冬の家座に着いていた。彼の前には暖炉の火が燃えていた。36:23 エフディが三、四段を読むごとに、王は書記の小刀でそれを裂いては、暖炉の火に投げ入れ、ついに、暖炉の火で巻き物全部を焼き尽くした。36:24 王も、彼のすべての家来たちも、これらのすべてのことばを聞きながら、恐れようとせず、衣を裂こうとしなかった。36:25 エルナタンとデラヤとゲマルヤは、巻き物を焼かないように、王に願ったが、王は聞き入れなかった。

36:26 王は、王子エラフメエルと、アズリエルの子セラヤと、アブデエルの子シェレムヤに、書記バルクと預言者エレミヤを捕えるよう命じたが、主はふたりを隠された。

第九の月は 11 月の終わりから 12 月です。暖炉の火で焼き、しかも、数段を読ませた後に、小刀で裂いて焼いていくとなつては、これはその言葉に対する怒りや嫌悪があることでしょう。教会史の中でも焚書というものがあり、聖書を無くすために火に付けて焼くということがたびたび起こっていました。けれども、ご存知のように聖書は世界のベストセラーであり続けています。先ほど、バラクの朗読を聞いて恐れた首長たちは、やめてほしいと願っていますが、王は恐れることはありませんでした。そして、首長たちが懸念していたとおり、エホヤキムはエレミヤとバルクの殺害を命じますが、主が隠されたとあります。首長たちが隠れていなさいと言っていました、本質的に隠してくださったのは主ご自身です。主が約束したとおりですね、エレミヤに対して最後まで彼を救うことを、彼を召した時に約束しておられました。

ここでなぜ、エホヤキムはこれほどまでにエレミヤの言葉、神の言葉を憎んだか？ということを考えてと思います。バビロンから救われるために断食までさせていたのに、それでもバビロンが来ることを預言していたからです。29 節に書いてあります。このように、自分が強く思っていること、願っていること、感じていることがあって、それと真っ向から反対することを言われたので、怒っているのだと思います。ここが、大きな問題であります。私たちは、自分は「これは当然だろう」というような考えがあります。その部分に触れられると、非常に怒ります。「なんと、酷いことを言うのですか！」と反発します。誰が、外国によって攻められることを由とする王がいるのでしょうか？

けれども主の御心は、そのような悪いこと、災いをも用いて、もっと大事なことを語ろうとされていることです。ここにへりくだりが必要です。私たちが当たり前だと思っていることが取り除かれ、災いである、悪であると思っていること。これらを神がお許しになることがあるのです。なぜなら、もっと大切なことを忘れているからです。彼らは悔い改めなければいけません。悪の道から立ち直らないといけません。その御心を置き去りにして、ただ悪いことが起こらないように考えていた、これが、エホヤキムが御言葉に対して怒りを燃やした理由だったのです。

したがって、私たちは祈る必要があります。純粋な神の言葉にいつも、柔らかであること。そして、自分の感情や思い込みによって、神の言葉にさえ激しい怒りを抱くようなことなことがないように祈る必要があります。今朝交読で読んだ詩篇 19 篇が良いでしょう。そこには、主の御教えの完全さ、その確かさと正しさ、それから聖さが書いてあります。そして、主への恐れはきよく、とこしえまで変わらないとあります。それからダビデはこのように祈っています。「19:12-14 だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょう。どうか、隠れている私の罪をお赦してください。あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配しませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。私の口のことばと、私の心の思いとが御前に、受け入れられますように。わが岩、わが贖い主、主よ。」

2C 廃れない御言葉 27-32

36:27 王が、あの巻き物、バルクがエレミヤの口述で書きしるしたことばを焼いて後、エレミヤに次のような主のことばがあった。36:28 「あなたは再びもう一つの巻き物を取り、ユダの王エホヤキムが焼いた先の巻き物にあった先のことばを残らず、それに書きしるせ。36:29 ユダの王エホヤキムについてはこう言え。主はこう仰せられる。あなたはこの巻き物を焼いて言った。『あなたはなぜ、バビロンの王は必ず来てこの国を滅ぼし、ここから人間も家畜も絶やすと書いたのか。』と。36:30 それゆえ、主はユダの王エホヤキムについてこう仰せられる。彼には、ダビデの王座に着く者がなくなり、彼のしかばねは捨てられて、昼は暑さに、夜は寒さにさらされる。36:31 わたしは、彼とその子孫、その家来たちを、彼らの咎のゆえに罰し、彼らとエルサレムの住民とユダの人々に、彼らが聞かなかったが、わたしが彼らに告げたあのすべてのわざわいをもたらす。」36:32 エレミヤは、もう一つの巻き物を取り、それをネリヤの子、書記バルクに与えた。彼はエレミヤの口述により、ユダの王エホヤキムが火で焼いたあの書物のことばを残らず書きしるした。さらにこれと同じような多くのことばもそれに書き加えた。

ここから分かることは二つあります。一つは、神の言葉はそのまま立つ、ということです。それを投げ捨てたいと思っても、神の言葉は全然影響されない、ということです。「1ペテロ 1:23-24 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わる事のない、神のことばによるのです。「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。」ここでは、主はさらに付け加える形で、前にもましてご自分の言葉が書き残されていくこととなります。

そしてもう一つは、御言葉を拒むことによって、災いが自分自身に及ぶということです。エホヤキンは、自分自身は死体が野ざらしにされて、それから自分の息子エホヤキン、妻、その周囲の人々が捕え移されます。自分は神の言葉を除去したと思っていますが、全く影響を受けておらず、その御言葉通りになるということです。神は恵みによって、御言葉を聞き、主に恐れを抱く人には憐れみを示してくださいます。神は、できないから罰するのではなく、へりくだる、悔い改める者を喜ばれるからです。けれども、拒むのであれば、恵みを自ら横に追いやってしまっています。神が罰するというよりも、自分が敢えて災いと呼びよせていると言った方がよいでしょう。

ですから私たちは、主からの命令に対して、三つの反応があります。一つは中途半端です。聴いているようで、自分の都合に合わせて守ろうとしたり、もう要らなくなったら守らない、という表面的な聴き方です。これがゼデキヤ王でした。そしてもう一つはエホヤキムのような聞き方、自分がこれだと強く思っていること、感じることがあって、しかし神がもっと心にある罪を取り除きたいと思われて語られることを、絶対的に拒否することです。けれども、もう一つはレカブ人にありました。主に従順になるということです。主から言われていることは、そのまま聞く。そして守ります。大事なものは、主ご自身に対する姿勢です。心の状態です。